「教育実習体験レポート」

[公立中学校　社会]

私は母校の中学校で３週間の実習を行いました。振り返れば怒涛の３週間で、長いようで短く、濃度の高い実習生活となりました。私が加わったのは二年生のクラスで、朝の SHR で自己紹介をした時の生徒からの興味の眼差しは今でも鮮明に思い出されますが、とにかく初日は「生徒たちに受け入れてもらえるだろうか」「どんなふうに接していけばいいのだろう」といった不安が思考の大半を占めていたように思います。生徒に自己紹介シートを記入してもらい特徴をつかんでいったり、それぞれの席の場所を覚えたりと大変でした。そうした実習の中で私が学んだことは大きく２つあります。一つ目は「生徒をよく見る」ということです。生徒たちの様子、特にその「変化」にどれだけ気付いてあげられるかで、生徒との信頼関係は大きく変化するのだと実感しました。体育祭のダンスの練習中にあまり体を動かしていない生徒が一人いたのですが、その生徒に「先生もダンス苦手やわ」「振り付け難しいけど、ここの決めポーズはしやすいから、まずはそこだけでも一緒に揃えてみよう」と声をかけ、自分も振り付けを覚えて一緒に練習した結果、当日その生徒が一生懸命踊り終えて「なんとかできた」と笑顔を見せてくれました。他にも授業での発表の際、言葉を付け足して自分の言葉で説明していた生徒に「すごくよかった」と一言声をかけると、次の授業からも自分なりに考えて言葉で説明しようとしてくれました。こうした小さいけれど彼らにとっての確かな変化に気付けたこと、自分の言葉や行動が彼らにとって大きな影響を持つものであると認識できたことは、実習に行かなければ得られなかった経験でした。二つ目は「イレギュラーを当たり前だと思うこと」です。言葉では矛盾しているかもしれませんが、授業・休み時間・給食の時間・部活などを問わず、想定していないことや予定通りに行かないことが多くあります。実際、最後の研究授業が急遽 45 分の短縮授業となったために予定が狂い、先生方の視線が集まる中、授業を行いながらその構成を大幅に改変しなければならないことがありました。自分の中では「今日はダメだった」と落胆していたのですが、そのあと校長先生から「授業は指導案通りに行かないことの方が圧倒的に多い。今回のように自分でそのイレギュラーに対応しつつ授業を行うことが教師には求められる」と声をかけていただきました。自分の認識を改めると同時に、イレギュラーに対応するためには「自分はどうしたいか」という軸が定まっていなければならないと感じました。それが、例えば授業では課題設定や中心発問の展開となって現れてくるのだと思います。ここで私がお話ししたのは多くの体験のほんの一部で、実習生同士の交流で絆が深まることもあれば、担当教員の先生と授業内容から人生相談までいろんな話をすることもありました。最後に生徒たちから寄せ書きの色紙と集合写真をもらった時は泣きそうになりました。今でも宝物として大切にしています。生徒・教師を問わず多くの人と関わり、どれだけ自分の中に取り込んだかが重要です。皆さんも実習先では大変な経験をすることがあるかもしれませんが、時には現場の先生方や実習生の仲間を頼り、そこからたくさん吸収して実りある実習を終えられることを願っています。頑張ってください。